夫との死別から二十七年、九十一歳脚本家の問題提起

私は安楽死で逝きたい

日本も安楽死を認める法律を早く整備すべきです

脚本家 橋田壽賀子（はしだすがこ）

「渡る世間は鬼ばかり」

「おしん」

一年半前に九十歳をむかえたのを境に仕事から遠ざかっていたのに、この夏は、また一本「渡る世間は鬼ばかり」を書いてしまいました。去年から頼まれていた仕事でしたから本当は六月に書き上げなければいけなかったのですが、ちょっとナメてのんびりしていたら、九月放送と聞いて慌てて書きました。

私のドラマはロケーションがなくセットだけで収録されます。ですから遅れるとセット代がかかって大変。中身はないけれど、〆切だけは守るっていうのが私の仕事の信条ですから、七月のひと月で四時間のドラマを書き上げました。書き出したら何でもないんです。「鬼」は老若男女の登場人物がいて、どの年代もそれぞれ問題を抱えていますから、けっこうネタには困らない。あまり苦労することなくちょろちょろっと書いてしまいました（笑）。

この机で書けばなんとか書きあがるという変な自信があるんですね。結婚前に買った食堂用のテーブルで、東京からここ熱海に持ってきました。塗り直したらちょっとゲスな色になってしまって、いまはこうやってクロスをかけていますけれど、「おしん」も「おんな太閤記」もみんなこの机で書きました。私にとって守り神みたいなものなんですよ。

あしたは二〇一七年版の「鬼」の打ち合わせということでテレビ局の方が訪ねて来ます。登場人物が成長していくから、次も見たいとテレビ局に投書が来るそうです。えなり（かずき）もあんなに小さかったのに、いまは嫁姑問題。ワンシリーズで終われればよかったんですけれど、同時進行しているからいつまでも続く。来年も生きていれば書くかもしれません。もう本当にお金を稼いでもしようがないんですけれどね（笑）。

スマホで安楽死について調べてみた

それで、その「鬼」を見た人からいろいろな連絡があって、また考えさせられました。

電話をくれたのは同世代の親戚。私の新作をひさしぶりに見たのを喜んで連絡してきた。「元気でよかったね」というので私もふつうに話していたんですけれど、むこうは「元気でよかったね。よかったね」ばかり言う。ちょっとおかしいなと思ったら、子供に代わって「すみません、ちょっともうキテいます」と。「ドラマを見て電話をかけたいというので電話をさせました。忙しいのにすみません」と言う。

もう一つは私と同じ年のファンの方から来た手紙。毎年、季節になると果物を送ってくださって応援してくれた人です。そのお子さんがお手紙をくださって「母は認知症が出てシェアハウスに入りました。毎日果物を送れというので送りますが、もう家にはおりませんので御礼状はけっこうです」とありました。年を取ればみんなそうなるんです。「明日はわが身だな」とあらためて感じました。

私は八十歳を過ぎた頃から、もし認知症になったら安楽死がいちばんと思っています。

二十七年前にテレビマンだった夫に先立たれ、子どももいませんし、親戚づきあいもして来ませんでしたからまったくのひとり身。周囲に迷惑をかけたくありませんから、頭がボケた状態では生きていたくない。何もわからなくなって、生きる楽しみがなくなったあとまで生きていようとは思わないんです。

どうしたらいいのかと思って、調べてみたらスマホでもいろいろわかった。スイスには、七十万円で安楽死させてくれる団体があるのです。

安楽死は日本では認められていませんが、スイスのほかに、オランダ、ベルギー、ルクセンブルクのヨーロッパ各国のほか、アメリカのニューメキシコ、カリフォルニア、ワシントン、オレゴン、モンタナ、バーモントの

六つの州では認められているそうです。これらの国や州には、安楽死を叶えてくれる団体があります。

その中で外国人を受け入れてくれるのは、スイスにある「ディグニタス」という団体だけ。安楽死とは正確に言うと合法的な自殺ほう助で、さまざまな厳正な審査を受けたうえで、合格した人だけが致死量の薬物を飲んで自分で死ぬというものです。

ディグニタスでは、希望者が提出した医療記録を医師が審査し、治る見込みのない病気で耐え難い苦痛を伴うなど、裁判所が認めた場合に限り、致死量の麻酔薬を処方され安楽死が叶えられる。

利用する外国人は、二〇一三年が百九十七人。増加傾向にあるが、同年まで日本人の利用はないという。

スイスならいつでも行けます。でも、いつ行くかというタイミングが難しい。最後の日まで本人の判断能力があることが安楽死をさせてくれる条件らしいですから、ボケてからでは行けません。見極めが難しいと思っています。でももし私が行くことになったら、ドキュメンタリーでやったら面白いと思うので、スイスを訪れてお骨になって帰るまでを撮ってもらおうかなと思っているんです。

プロデューサーの石井ふく子さんにこういう話をすると「縁起でもない話しないで」とすごく怒ります。石井さんは私より一つ年下ですが、まだまだ仕事に生きている。ご自分の会社を持ってスタッフや俳優さんを抱えているし、舞台もやっているから一生懸命働くことしか考えていない。雇っている人がいると、いい意味で生きがいにはなるかもしれないけれど、簡単に死ねないなと思って見ています。私はそういうふうになりたくないし、仕事はいっぱいやったから、もういいんです。

死について考えたくないという人がいるのはわかります。でも私は、死というものにマイナスのイメージを持ったことがないんです。

私の死のイメージは寝ているようなもの。眠ってしまうと何もかも忘れてしまうでしょう。あれと同じようなものだと考えています。あの世で会いたいと思う人はいません。この世でしたいと思うことは一杯しました。あまり恋愛はしませんでしたが、もう、あれもこれもしたいとは思いません。心を残す人もいないし、そういう友達もいない。そういう意味では、のん気な生活を送っていますけれど、ただ一つ、ボケたまま生きることだけが恐怖なのです。周囲には、「私がボケてると思ったら言ってね」と話してあります。もし、そう言われたらすぐにでもスイスに行く準備にかかろうと思っています。

安楽死の制度があれば悲劇は防げる

日本では、尊厳死法案が議論されることはあっても、反対にあってなかなか実現しません。しかも、これまで議論されてきた法案は、私の望む安楽死を認める法案ではありません。終末期にある患者本人の意思によって延命治療を行なわない、あるいは中止することを認めるだけの法律です。つまり安楽死よりずっと手前の法律さえまだ認められていないのが日本の現状なのです。

でも一般の人にアンケートを取ると、安楽死・尊厳死の賛成派は七割近くいる。反対はわずか一〇%しかいません（「週刊文春」二〇一四年十一月二十日号）。どんなに辛くても生きていたいという人はいまや日本でも少数派なのです。

政治家がこの問題を取り上げるとなにか差し障りがあるのでしょうか。私は、認知症患者の現実をよく知っているお医者さんが団体を作って陳情をしてくださるといいと考えているんです。いま病院は、認知症の人をいつまでも預かってくれません。悪い言い方をすれば、病院から追い出してしまう。追い出すくらいなら、希望する人は死なせてあげたらいいではないですか。

もちろん理想を言えば、同居をして家族が面倒をみるのがいちばんでしょう。でもそんな理想は現実にどれだけありますか。同居をすればケンカもする。介護離職して面倒をみていた息子が絶望して寝たきりの親を殺したり、老老介護の果てに無理心中といった胸の痛むニュースを見るたびに、安楽死の制度があればそうした悲劇も防げるのに、と思うのです。

だから親も子も同居を希望しない。それで介護が必要になった後は、施設に預けられて誰の面会もないまま、姥捨て状態ということはよく聞く話です。施設に入れば、ベッドに縛り付けられて大きな声を出せば手荒なまねをされることもある。そんな状態になって十年も二十年も生きたりしたら、本人はもちろん家族もたまりません。

私は、日本でもスイスのように安楽死を認める法律を早く整備すべきだと思っています。回復の見込みがないままベッドに寝ているだけで、生きる希望を失った人は大勢います。長患いをしてもうこれ以上子どもに迷惑をかけたくないという人もいる。そういう人が希望するならば、本人の意思をきちんと確かめたうえで、さらに親

類縁者がいるならば判をもらうことを条件に安楽死を認めてあげるべきです。

そんな制度を認めたら、悪用されて認知症の人が早く殺される恐れがあると言って反対する人もいるようです。たしかに制度がきちんとしていなければ、遺産目当ての殺人も起こるかもしれない。でも厳しい審査を条件とした法律をつくれば、そんなことも防げるのではないでしょうか。

子どもに期待してはダメ

私には、がんで死を覚悟して亡くなる方は幸せに見えます。がんの場合は、わかってから人生を振り返る時間があります。会いたい人には会えるし、整理しておきたいことも自分でできますから。

夫ががんであるとわかったときは、主治医から「余命半年、もう治らない」と言われたので告知しませんでした。でもあとから思うと、告知しなかったのは私の利己主義だったと思って反省しています。あのときは自覚していませんでしたけれど、死期がわかった主人と毎日いっしょにいるのは辛いと思ってしまったような気がするのです。主人にしてみれば、死ぬ前に会いたい人がいただろうし、ものを上げたい人もいたと思う。そういうことをまったく聞かないで、後で考えたら、そうか、私は自分のために告知しなかったんだという思いがあるんです。

私の場合は、がんになったら無理な治療はせず、痛みを取ってくれるホスピスに行くつもりです。病院によってはあらゆる手段で生かそうとするところもありますが、私は緩和医療で痛みを取ってくれるならそれで満足。ホスピスでは宗教的なお話もしてくれるそうですから、そこでゆっくりと人生を振り返りながら、最後の時間を過ごせたら最高だと思う。

主人が亡くなってからは、もう頼る人もいませんでした。いまは朝八時から午前中だけ地元・熱海のお手伝いさんに来てもらって料理してもらったり掃除してもらったり、いろいろなことをやってもらっています。大好きな船旅もいっしょに来てもらう子には私がお金を出しています。人件費はけっこうかかりますがそれはいい。そのために働いてきたんですから。

誰にも心配や迷惑をかけることもなく、自分のお金で面倒をみてもらって死ぬ。そうしようとずっと考えていました。子どもがいれば、子どもに投資してあとで返してもらうことができますけれど、私の場合は、投資する

相手がいないから、お金は貯めておかなくてはいけないとずっと意識していました。

そういう私が言うと変に思われるかもしれませんが、子どもがいる人にも自分のことは自分で準備しておくことを薦めておきたいですね。子どもにしてやるのはかわいいからしてやるのであって、自分たちのことは一生振り向いてくれなくていいよというくらいの気持ちでないと、少しでも子どもに期待するとダメ。期待を裏切られたとき恨みになることが往々にしてあります。

私より少し年下の身近な女性がそうでした。夫が亡くなってお姑さんの面倒を見ながら子ども二人を育て、いずれ息子夫婦と一緒に住むつもりで二世帯住宅を建てた。そうしたらお嫁さんが嫌だと言い出して、広い三階建ての住宅に長いこと一人暮らしです。孫は小さい頃にはよく遊びに来ていましたが、独立すると忙しいからもう顔を出しません。

「この子が来てくれない。あの子もあんなに面倒見てやったのに」

とこぼすので、

「可愛いと思ってやってあげたんだから、一人で好きなことをしなさいよ」

と慰めたのですが、自分のためにやりたいことが何もないんです。家族に尽くすことが彼女の一生でしたから。

結局八十歳を超えたくらいで孤独死でした。誰も覗いてくれないから二日わからなかった。

ずっと彼女に言われていたんです。「壽賀子さんはかわいそうだ、子どもがいないから」と。私は何か言うと負け惜しみみたいだから黙って聞いていました。でも最後には、「壽賀子さんは独りを覚悟してるからいいわね」と言っていた。あのとき、家族に期待すると余計に

寂しい思いをするものだなと思いました。

私は次男の嫁でしたから義理の父母に仕えた経験はありません。それでも姑とは価値観がちがうと感じることが多く、いっしょに暮らすものではないと思っていました。同居したら、やはり日本の家庭では年上の言うことを聞くのが常識。嫁の立場としては、自分を殺すことを強いられる。私には絶対に無理だと思っていたのです。

姑との関係は主人の実家には知られていたようで、主人が亡くなるときには、「壽賀子さんはうちの墓には入れない」とはっきり宣告されました。私はもともと入るつもりがなかったから、「そうですか、わかりました」と言うだけ。お墓の中でまで一緒は嫌でしたから、「ありがとうございます」という気持ちもないではありませんでした。

原節子さんのようにひっそりと死にたい

実は、その前に日本文藝家協会が作った「文学者之墓」（静岡県・富士霊園）に登録していて、主人とは二人でそこに入ればいいと話していました。でも亡くなった主人一人をそこへ入れるのはかわいそうだし、主人はマザコンでもあったので実家のお墓に入ってもらって、文学者之墓には、主人と私の腕時計をいっしょに入れてもらうように遺言してあります。

橋田さんは、遺言、生前整理、遺産の寄贈、要介護や認知症になった場合の準備などをすでに終えたという。

遺言は八十歳になったときに書きました。書いておかないと国に取られてしまうと弁護士さんに言われて、「遺産はすべて橋田文化財団に寄付する」とだけ書いた。あとは書き直す必要はありません。でもそれ以外のことは、しばらく何も手を付けていませんでした。

いわゆる終活を始めたのは八十九歳のとき。

「ママはもう九十なんだから、じゅうぶん歳を取ってるんだよ」と泉ピン子に言われたのがきっかけです。

いざ取りかかってみたらこれが大変。最初に、溜め込んでいたモノの整理です。これまで書いてきたドラマの原稿や放送されたビデオテープが膨大にありました。次に私物。本はあらかた熱海市の図書館に寄付して、資料として取ってあった新聞の切り抜きはすべて処分。押し入れの中から使わずにいたハンドバッグが百二十個も出てきて、リサイクルショップへ持って行ったら四十数万円になったのでびっくりです。

俳優さんはじめ、いろいろな方からいただいたお手紙もたくさんありました。全部読み返して、どうしても、というもの以外は処分しました。ファクスも森光子さんや山岡久乃さんから届いたのをたくさん取っておいたのですが、昔の感熱紙だから消えかかっていて、これも再現できるとは聞いたんですけれど全部処分しました。

戦争を経験した私たちは、モノを捨てられない性分ですから、よけいに大変（笑）。二年かかりました。みなさんも、体力があるうちにやっておいたほうがいいですよ。

年を取るとあまり人に会いたいとも思わないものです。特にむかし素敵だなと思っていた男性と、あまり間を置いて会うのは問題（笑）。がっかりすることがあるし、こちらもがっかりされる。ずっと付けていた日記はやめましたし、ファクスも夜中にガタガタ入ってくるのが嫌で外しました。自治体がＡＥＤ（自動体外式除細動器）を貸してくれるという話も、お手伝いさんたちは講習を受けるからと言ってくれましたが、心臓が止まったらそのときはそのときと思って断りました。

もう私は終わったと思っているんです。終わったと思ったから、これまでの人生の反省もするし、いろいろ整理もしました。「鬼」の脚本を書けと言われれば書かなくはないけれど、本心では、そろそろ自分のことは忘れてもらいたいと思っています。私の希望は、誰にも知られることなくひっそりこの世を去ること。だから死んでも絶対に公表しないで、葬式もしないでと言ってあります。

葬式をしないのは、私が葬式に行くのが嫌いだから。盛大なご葬儀のたびに本当に偲んでいる方はどれくらいいるだろうと思ってしまう。どうしても最後に一目会いたいから行く、というのならいい。子どもや親戚のためにやることもあるかもしれない。でも私にはそういう人はいません。忙しいのに義理で来ていただいてもうれしくないし、もう私に義理を感じることもないんですからお葬式はいらないというんです。

テレビに訃報が出るのなんて想像したくもありません。原節子さんのように、人に知られずひっそりと死にたい。「あの人、最近見ないわね。あっ亡くなっていたの？」って言われるくらいが私の理想です。